



友達になろう

BE A FRIEND

1994—95年度国際ロータリーのテーマ

- 国際ロータリー会長 ビル・ハントレー ● 第2560地区ガバナー 大島 精次
- 会長——高橋 一夫 ● 副会長——石橋 育於
- 幹事——五十嵐晋三 ● 副幹事——松谷 昊吉
- SAA——平原 信行 ● 副SAA——清水 良一 ● 例会日——毎週水曜日 12:30～
- 例会場——三条市旭町2—5—10 三条信用金庫本店 TEL 34—3311
- 事務局——三条市旭町2—5—10 三条信用金庫本店 TEL 35—3477
FAX 32—7095

出席者会員数

会員 79名中 57名

先々週出席率

87.67% (前年同期 90.79%)

ヴィジター

三条南より 葦沢喜一郎さん

先週のメイクアップ

- 5/10 新潟県下ゴルフ大会へ 松谷昊吉さん、佐野勝栄さん、山田富義さん
- 5/13 ローターアクト委員長会議へ (高崎) 中村和彦さん
- 5/14 越後春日山チャーターナイトへ 高橋一夫さん、野村竹三郎さん、榎本勝さん
- 5/15 三条南へ 斉藤弘文さん、五十嵐晋三さん、吉井俊介さん、山田富義さん、
鈴木宗資さん、藤田紘一さん
- 5/16 三条北へ 加藤紋次郎さん、広岡豊作さん

会長挨拶

高橋(一)会長

みなさんこんにちは、南クラブから葦沢さんようこそいらっしゃいました。また会員の渡辺勝利さんには、久しぶりにお元気な姿をみせていただき本当にありがとうございます。

早く体力をつけていただきまして三条のほうに帰って来ていただきたいと思っています。

15日の三条祭りは、お天気のほうもまあまあで心配していたのですが尻あがり安定してまいりまして無事に祭り、大名行列を終わらすことができましてありがとうございます。

14日の日曜日に交通安全パレードがございました。平原さんと私、それにロータリークラブの会員の方も沢山参加していただきました。本当にありがとうございました。また、その日高田で『越後春日山クラブ』という私共の地域の第92番目のクラブが誕生し、そのチャーターナイトに行きまして参りました。

大島ガバナーの御挨拶の中で、これは今迄にも何回か大島ガバナーの御挨拶の中で使われる言葉なのですが「“ぞうはぞう組” “にんじんはにんじん組” 放っていてもにんじんはにんじんの種を残し、バラはバラの苗を残す。けれどもロータリアンは何もしないとロータリアンを生むことはできない」というようなお話をされておりました。その中でロータリーは団結すれば戦争まで防げるんだと。ロータリーが出来たばかりの時にUSスチールに対し“あなた方が鉄を売らなければ、弾丸も大砲もできないし軍艦もできないんだ”といったようなことを話されておりました。そのお話を聞きながら考えたのは今、社会問題になっているサリンの問題です。あれだけの設備といろいろな薬品をオウム教は買っているわけです。あれは誰かが売っているわけです。それはもちろんオウム教に直接という形ではなくて、いろいろカモフラージュをしながらオウム教のほうも集めたのでしょが、あれだけの大量のものですから、多少心痛んでいる企業もあるのではないのでしょうか。ロータリアンの企業でなければいいがなと念じておりました。

16日はそのオウム教の教祖が逮捕されたり、青島都知事に爆弾が送られるとか、日米自動車構造摩擦で、ついにアメリカが日本の高級車に対して100%の関税、という形でWTOに提訴するとかの非常に大きな事件、事柄が3つ並んだような気がします。いわゆる今迄の規制、教育、政治、経済というものが、どうも対抗できないような状況になっているのだからと思わせるような感じの事件が昨日3つ起きました。

私はこの連休にちょうど2週間アメリカ、カナダを回ってきたのですが、彼らと話していると、今回の円高はもう完全におまえたらの問題である。早く市場をきちんと開放して自由にすればちゃんと元に戻る。それをしないから、こういうふうな形の円高になっているというように意見が全部統一されておりました。同時にいろいろな話を見たり、聞いたりしてきたのですが、円高で困っているのはほとんどいないのです。メイドインジャパンの商品、例えば日本車のディーラー、またどうしても日本商品でなければダメというかたちで八百半に食べものを買に行くような人達が値上りしているものですから、ちょっと大変なのですが、ほとんどはアメリカでもカナダでも日本の円高というのは庶民の生活には全く関係ないといってもいいようでした。この円高の問題というのは市場を開放してきちんと彼らの言う通りになるのか、あるいは日本経済というのはこういう形で、その仕組みをやるのだからという法律というか、そういうものを作ってでもこう進むんだというようなことを早く決めないといけない。それをだらだらして時間が経過すればする程、困るのは

日本自身だという感じをこの2週間の旅行で感じてきました。
早くなんとかしてもらいたいなあというのが実感でございます。

幹事報告 五十嵐(晋)幹事

◎三条クリーン協議会より 第2回担当者会議のご案内がとどいております。

と き 5月24日(水) PM12:30~

ところ 三条中央公民館

◎日本支局より ロータリー適用相場変更のお知らせがとどいております。

6月1日より 1ドル80円(現行レート84円)

ニコニコBOX ¥17,000

17日分

- 高橋(一)さん 五十嵐晋造さんの御長男の結婚式におよばれをしてきました。連休は2週間アメリカ、カナダを廻って来ました。渡辺さん御元気な姿を見せていただき安心しました
- 岩井さん 久しぶりにBOXに入れさせていただきます。所得の公示がされましたので。
- 松谷さん 県下RCゴルフ大会に参加しました。参加する事に意義のあるスコアでした。
- 平原(信)さん 先週、清水副S.A.Aにかわっていただきましてありがとうございます。
- 高橋(政)さん 先週のクラブ会報の原稿の件で、石橋副会長及び内山昭二さんに御迷惑をおかけしました。
- 渡辺(勝)さん 暫らくホームクラブ欠席でしたが全く久しぶりの出席です。少し落ち着きましたので、又、よろしくお願ひします。
- 五十嵐(総)さん 久しぶりのホームクラブ出席。

ロータリー財団ボックス ¥20,000

5月17日分

- 荻根沢さん 麻原氏が捕まりましたので。
- 松縄さん、上木さん、杉野さん、佐野さん、清水さん、五十嵐(昭)さん 財団に協力します。
- 小林(英)さん 五十嵐委員長に協力して。

卓話

「環境の保全と産業」 外山雅也会員

今日ほど環境に関する問題が大きく取り上げられている時代はないだろうと思われま。毎日のマスコミの報道は「地球にやさしく」と訴え続けているのが実情です。環境との共存を求めて21世紀の企業像、即ち環境の視点をどう企業経営に織り込むのか、「排出ゼロ」の構想を論ぜられるまでになっています。

地球の生態系はそこに生息する生物の微妙なバランスの上に成り立っています。そのバランスが少しでも崩れると必然的に生態系自体にも多大な影響を及ぼすこととなるでしょう。今はその瀬戸際にある感がいたします。残念ながら、地球環境を悪化させる最大の加害者が実は人類に外ならぬことは今日、明白です。

私達人類が豊かな生活を求めて築き上げた近代技術文明は、自然を征服し、資源とエネルギーを大量に消費し、その分大量の廃棄物を生み出しました。それが結果として地球環境を悪化させ、自然の生態系を崩壊の淵まで追



い込んでいるのではないのでしょうか。これ以上地球環境を悪化させずに人類が自然と共存していくためには、自然を征服する代わりに自然の一部と同化することと、同時に資源とエネルギーを大量消費するのではなく、それらを「リサイクル」即ち循環させ、環境悪化の要因となる廃棄物を最小限に抑え込むことが重要であり、かつ求められているのです。いわば近代技術文明と異なる発想体系に支えられた新しい文明の構築が求められている、との認識が必要なのです。

こうした新しい文明の創造という大命題に向け、経済人として如何に取り組むかを主題に内外の専門家、経済人がいろいろと模索をされています。その一つに「廃棄物ゼロ」という構想があります。これは企業の吐き出す廃棄物をゼロにしようとの考えです。その為にはこれまでの生産システムを根本的に作り変えるだけでなく、各産業間、異種産業間における協力関係も「リサイクル」という視点から再構築する必要があります。既存の産業構造を見直し、A社の廃棄物をB社の原材料に、B社の廃棄物をC社の原材料に、といった具合で環境重視の産業連鎖を考慮した新しい産業構造を作り上げていこうということです。20世紀の企業は労働生産性の向上や資本収益の効率化などの分野では大きな成功をおさめました。しかし、天然資源やエネルギーを効率的に利用しようとする発想を遂に待た合せては来なかったように思います。このためエネルギーや資源は効率的に使われず、一度利用されると再利用されることなしに、廃棄物として捨てられる場合が多かったのです。

原材料の無駄遣いが際限なく続いたため、これまで無限と思われていた化石燃料や天然資源の多くが近い将来枯渇する恐れも出てきました。そればかりではなく、大量に放棄された廃棄物は大気や土壌、地下水を汚染し、二酸化炭素の排出は地球温暖化現象を促進させています。

資源を有効に何度も利用し、その再生産性を高めることが出来れば、資源の枯渇化や地球環境の悪化を防ぐ一石二鳥の対策となる訳です。かかる計画を実現させるためには、異業種間の協力が欠かせなく、また情報の交換も重要となります。

日本の企業は生産や販売に関しては熱心ですが、廃棄物対策には殆んど無関心でした。一般廃棄物の後始末は自治体の仕事だと思い込んでいた感じがします。企業経営者の頭は産

業廃棄物の処理は専門業者に任せ、その処分費用をできるだけ抑えることが第一義だったのではないのでしょうか。廃棄物がいくら増えても専門業者の手によって右から左へ処分されるものだと決めてかかったのです。

しかし、このところ一方的に増加するばかりの廃棄物に悲鳴を上げる自治体が急増し、ここ二、三年、リサイクル活動が急速に進展してきています。とはいえ、廃棄物問題は依然として深刻な問題です。大量生産・大量消費の基本的な経済社会構造が変わらない限り、現状程度のリサイクル活動では排出される廃棄物の絶対量の劇的な低減は望めません。

一方、住民の反対等によって一般廃棄物、産業廃棄物とも焼却施設や最終処分場を新たに確保することは、相変わらず難しい事案であります。新潟県では、上越、中越、下越の三地区に第三セクター方式で各々最終処分場を確保する、との方針のもとに漸く二年程前、新潟県環境保全事業団が発足いたしました。その結果、昨年中越地区には出雲崎にその場所を選定することが出来ました。平成八年度着工の予定であります。

廃棄物を埋め立てる最終処分場には、①管理型 ②遮断型 ③安定型の三つのタイプがあります。具体的に申しますと以下のようになります。

①管理型最終処分場—処分場の内側に廃棄物からしみ出る水を外に漏らさないためのゴムシートやビニールシートの内張り（遮水工）を設けた施設。遮水工の内側に溜った水は浸出処理施設で浄化した後で放流する。

②遮断型最終処分場—通常の方法では無害化することが難しい廃棄物を収めるための施設。上部には屋根を設ける。中に溜った水を汲み出して外部に排出するような事はない。

③安定型最終処分場—埋め立て空間を外部と仕切る遮水工を持たない施設。コンクリート殻など、絶対に腐敗したり、有害物質が溶け出したりすることのない物に限って埋める事が出来る。

物質は化学反応によって姿を変えるけれども、決して消滅することはありません。同様に、廃棄物は如何なる処理をしても消えることはありません。21世紀に向け地球環境との共存を目指し、新しい文明を構築していくためには、早急に環境倫理を確立する必要があるでしょう。その意味で、環境問題を企業の努力にだけ委ねる事は限界があります。消費生活の積極的な協力が必要となります。

例えば、環境に配慮した製品は、今のところどうしても価格面で割高傾向にあり、また使い勝手が悪く、使い捨て商品の様に便利ではありません。しかし、環境への貢献という見地に立てば、前述の様な面には少々目をつぶり、進んで「環境にやさしい」商品を選択する勇気と見識が求められるでしょう。この点で草の根レベルでの環境倫理の確立が新しい文明を支える重要な要素となるのです。

最近の日本の環境対策技術が世界最高水準にある事も知られています。そうした技術が世界的に経済発展の著しい東アジア地域や中国の環境対策に総合的に活用されることが課題になるでしょう。石油や石炭など燃料から発生し、大気汚染そして酸性雨の原因といわれる物質に硫黄酸化物、窒素酸化物等があります。人間が化石燃料に依存せざるを得ない限り発生するこれ等の物質の低減もまた、地球環境にとって大きな課題の一つです。

これまで消費者は安くて付加価値が高いものを求めてきました。企業はこれに応えるべく、資本や原料、労働力をいかに効率的に組み合わせるか、という点に知恵を絞ってきました。さらに、品質の向上と「カンバン方式」の導入を通じて生産効率をアップさせ、製品に対してはデザインの洗練化をはかるなどの付加価値をつけて来ました。しかし、最近欧米では消費者の目が企業の倫理や道徳観、環境保全に対する姿勢へと向けられています。消費者のこの判断基準に注目し、企業側が如何にこれらの問題に前向きに取り組んでいるかを示せば、それを販売の伸長に結び付ける事も可能だといわれています。例えば、ある北欧の製紙メーカーが、有害物質にみなされる塩素を使わずに紙を製造する技術を開発し、その製品が割高にも関わらず欧州市場におけるシェアを大幅に延した事はその証左でしょう。

以上の事例をみても解る様に、次第に産業の構造は廃棄物を出さぬ方向へとシフトしつつあると思います。

けれども、一方で現在産業界では「とても不可能ではないか」という声が多数を占めているのもまた事実であります。そして、これまでの生産技術の進歩を考えれば、今後僅か20年程でこれも当たり前の事になるだろう、という意見があるのも事実です。

それが的中するか否かはさておき、地球環境問題は限りなくそうした方向を目指す事を人類に迫っていると思います。環境破壊の具体的な進行状況が逐一報告され、フロンによるオゾン層の破壊などを食い止める方法が明示されれば、私達一人一人の意識も変わっていかざるを得ないでしょう。それにしても人口が爆発的に増え、高度な文明社会を形成している現代では、私達が日々呼吸し、食事をし、移動をする、といったいわば生活行動自体が全体で見れば、環境に大きな負担を与えている事にもなりましょう。

以上の事に鑑みて考えると、環境破壊における最大の原因を作り出しているのはやはり人間である、との思いを払拭できません。インド思想にいう業（ごう）、その結果が今、環境破壊として顕在化しているならば、否応なく企業と私達はそれを真摯に受け止め、苦しくとも改善のための努力をし続けていかねばならないことを示唆していると思います。

三条RC	5月24日例会	クラブ創立記念例会（通常例会です）
	5月31日例会	卓話 「森林と環境」 前営林署職員 関根依智朗殿
	6月7日例会	卓話 丸山行彦会員
三条南RC	5月29日例会	卓話 石山荘一会員
	6月5日例会	槻の森総合運動公園見学例会 PM12:30～
	6月12日例会	クラブアッセンブリー
三条北RC	5月30日例会	会員卓話
	6月6日例会	
	6月13日例会	